



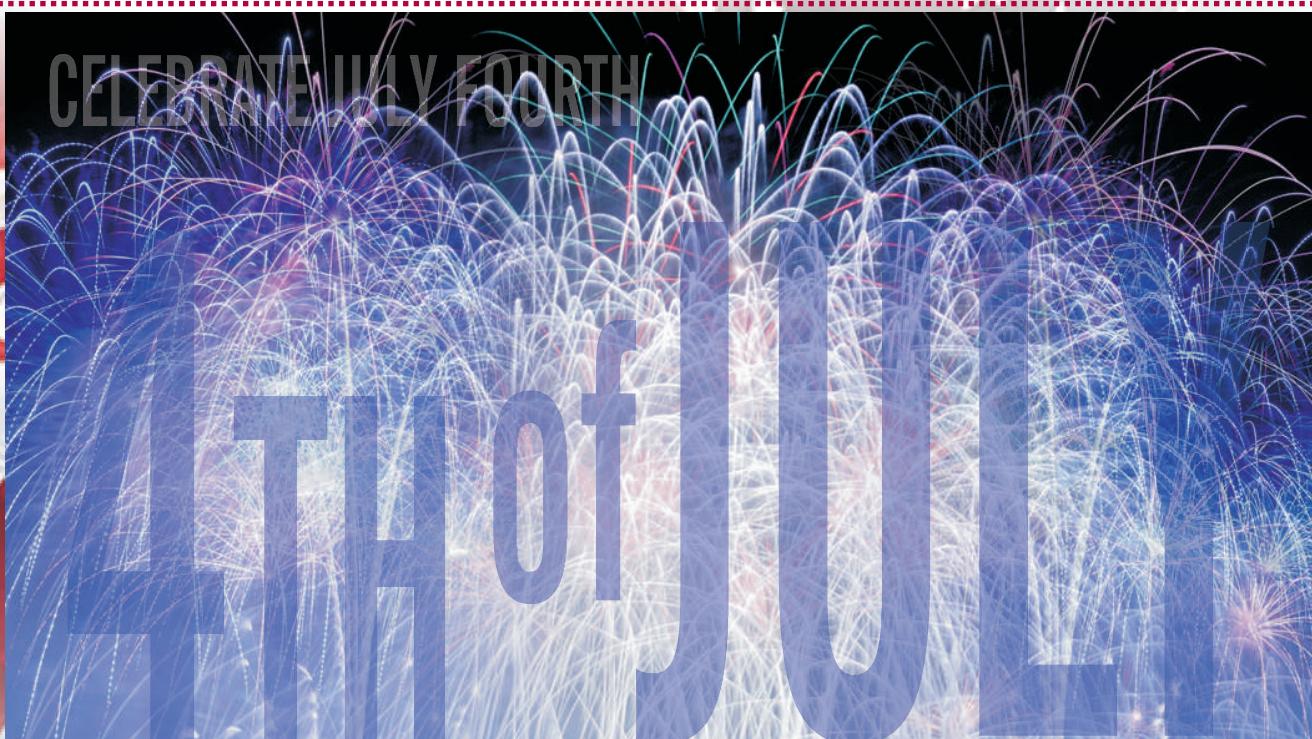
米国独立記念日

第18航空団広報局

7月4日（日曜日）、嘉手納基地内のマレック公園にて、第234回米国独立記念日を祝福する行事が開催されました。今年は「アメリカフェスト」は開催されず、基地の在住者を対象とした祭りとなりました。軍人やその家族にとって久しぶりの4連休となった週末、会場は軍人や多くの子供連れの家族らで賑わい、音楽ライブ、アメリカンスタイルの屋台、ゲームなどを楽しんでいました。夜は独立記念日にはかかせない花火が盛大に打ち上げられ、遠い故郷や遠隔地にいる家族や友人に思いを寄せた人も多かったことでしょう。



(件内の写真全て、米空軍：シェイロン・エドワーズ等軍書撮影)



Narasa Children's Shelter receives gifts from 18th LRS

第18兵站即応中隊 児童養護施設「ならさ」へ寄付

第18航空団広報局



18兵站即応中隊司令官ダグラス・ディカーソン中佐、及びバービナー氏より「ならさ」施設長の翁長克子さんへ自転車や簡易プール等が手渡された

ボランティア活動を活発に行っている第18兵站即応中隊は、2010年6月11日、石垣島にある児童養護施設「ならさ」へ自転車、簡易プール、プール専用エアポンプを贈りました。児童養護施設「ならさ」の翁長克子施設長が贈呈式のため嘉手納基地の同中隊を訪れました。

「ならさ」には現在34名の児童（1歳～18歳まで）が様々な事情で生活しています。同中隊の担当者は、施設で子供達が楽しく利用できるようにという思いで寄贈品を選びました。中隊で軍属として働くアラン・バービナーさんがボランティアの中心となり、資金造成活動(チリドッグ・セール)を2回行って資金を集め、自転車などを購入したことです。

GIFTS from 18 LRS

Narasa Children's Shelter receives gifts from 18th LRS

Narasa Children's Shelter receives gifts from 18th LRS

Narasa Children's Shelter receives gifts from 18th LRS

18 LRS

18th Logistics Readiness Squadron's Donation

(U.S. Air Force photo/Tech. Sgt. Rey Ramon)

▲ Lt. Col. Douglas Dickerson, 18th Logistics Readiness Squadron commander, along with Mr. Alan Bourbina, present a bicycle and an inflatable swimming pool for the children of Narasa to a director from Narasa Children's Shelter of Ishigaki Island, June 11 at Kadena Air Base. The 18th LRS raised money from a fundraiser a few weeks ago to donate toys to the children.

(U.S. Air Force photo/Tech. Sgt. Rey Ramon)

▲ Lt. Col. Douglas Dickerson, 18th Logistics Readiness Squadron commander, along with Mr. Alan Bourbina, present a bicycle and an inflatable swimming pool for the children of Narasa to a director from Narasa Children's Shelter of Ishigaki Island, June 11 at Kadena Air Base. The 18th LRS raised money from a fundraiser a few weeks ago to donate toys to the children.

RVO OSHIRO!

鏡が丘特別支援学校の高校生、
嘉手納基地内で初の職場体験を行う

第18航空団広報局



(写真全て、米空軍：レイ・ラモンー等軍曹撮影)

高校2年の大城亮君（16歳）は先天性による多発性関節拘縮症という四肢関節に不自由をきたす障がいがあり、現在鏡が丘特別支援学校に通学しています。大城君は英語にとても興味があり、卒業後は進学を希望し、さらには将来留学を目指したいという語学に対する意欲から、英語環境のある基地内の職場体験を希望しました。



嘉手納基地内にあるライズナー体育施設が受け入れることになり、6月8日から11日の4日間、大城君は職場体験をしました。大城君の主な業務はその体育施設のフロントデスクでの接客。軍人や軍属の米国人が様々な運動を行うために訪れる際に、大城君は英語での質問に対応したり、スポーツ用具の貸し出し、館内で行われているヨガ等の講座情報などを教えたりと初めての接客業務に挑戦しました。「はじめは緊張してみんなの話す英語の早さに追いついていけなかったりしました。今は少しずつ慣れてきて、接客した後にThank youと言われると疲れも吹き飛びます。

そんな時は障がいがあることも忘れてしまいます」と話す大城君。ライズナー体育施設のロブ・ウィルバーン施設長は「この従業員ともすぐに溶け込んで働いているし、彼が頑張って接客している様子を見て嬉しく思います」と感心した様子で話しました。

インターネットで多いときは一日に数時間も海外にいる友人と英語でチャットを交わす大城君は、幼い頃から海外の文化に興味があるそうで、この職場体験を通して米国人の印象を聞くと「米国人は通り過ぎる時にもハローと挨拶をするんです。その度に*イチャリバチョーデーという言葉を思い出しました」と感動した面持ちで話していました。

*イチャリバチョーデー：「一度出会った人は皆兄弟」という沖縄のことわざ



TEEN SHARPENS ENGLISH SKILLS AT THE RISNER

LOCAL TEEN SHARPENS ENGLISH SKILLS AT THE RISNER

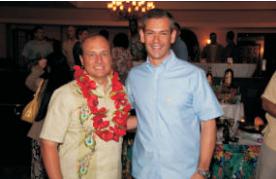
SAYONARA…フレッチャー大佐夫妻

第18航空団広報局

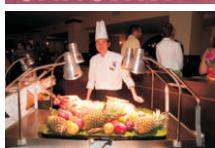


地元沖縄の方々とも親睦の深い第18任務支援群司令官フレッチャー大佐とシェリー夫人が異動のため7月末に離任することになり、7月10日、支援群主催の送別会が盛大に開催されました。送別会は沖縄の方々も多数出席される中行わられ、フレッチャー大佐自身と地元の友人數名による沖縄のサンシン（三味線）演奏で幕開けをしました。この2年間、沖縄勤務中多忙な日々を過ごすなか、フレッチャー大佐はサンシンを、そしてシェリー夫人は琉球舞踊のレッスンを受け、沖縄の伝統文化に親しんできました。大佐が使っていたサンシンの楽譜は、紛れもなく縦書きの工工四で、沖縄の来賓の方々もびっくり。正座をして「かじやで風」と「安波節」を奏でる大佐に熱い拍手が沸き起きました。

フレッチャー大佐率いる部隊は空軍でも最大規模の任務支援群の一つで、その配下には5個中隊、約3800名の軍人、軍属、日本人従業員が勤務しています。各中隊・群・航空団司令官も揃って送別会に出席し、フレッチャー大佐と大佐を支えたシェリー夫人へ、これまでの労をねぎらうと同時に感謝の言葉が溢れる送別会となりました。



2009年10月に行われた、嘉手納町の野国総官まつり控え室にて



(写真提供：小山幹太氏)



嘉手納基地第18航空団及び沖縄市、消防相互援助の覚書に調印

第18航空団広報局

2010年7月2日

人々の生命・財産を守るとき、嘉手納基地であれ沖縄市であれ地域の消防隊員らは共通の使命を全うする。このメッセージのもと、7月2日、第18航空団と沖縄市との消防相互援助の覚書が承認され、東門美津子沖縄市長、第18航空団司令官ケン・ウィルズバック准将が出席し、文書に署名する調印式が執り行われました。

「本覚書のもと、両方のコミュニティーに影響があるような火災が発生した場合、双方の消防隊の総合的な対応能力が強化されることになります。これは大きな前進です」と、ウィルズバック准将が挨拶で述べました。

嘉手納基地の消防隊の上部指揮官である第18施設群司令官スコット・ジャービス大佐は、これまで双方の消防隊員らは協力しながら訓練や実際の消防活動を行なってきましたが、今回の覚書締結は各々の消防活動を繋ぎ合わせるもので、と述べました。「緊急事態が発生した場合、場当たり的な対応ではなく、了解のもと堅実な対応がとれるという点でこの覚書は意義深いものであります」と高く評価しました。

高宮城寛沖縄市消防本部消防長は挨拶で、「市民の生命・財産を守るために、大規模災害に対する備えは重要な課題であり、高い知識と技術をもち、人員資機材とともに優れた嘉手納基地の消防隊との覚書締結を希望していました。」と述べました。

2009年9月に発生した火災で、嘉手納基地の消防隊員らと沖縄市他消防隊員らがともに作業し鎮火するのに5時間余りもかかったことがありました。その数ヶ月後、3台車両を巻き込む交通事故があり、閉じ込められた人を救出し2名の命を救った日米合同の消防隊活動もありました。

ジャービス大佐は沖縄市消防関係者に向かって「みなさんが我々の支援を必要とするとき、我々の消防隊員は皆様のために駆けつけ対応にあたります」と述べ、挨拶を締めくくりました。

